『厨子を通して見えること　－考古学的研究の成果と課題－』

吉　田　健　太

1.はじめに

那覇市立壺屋焼物博物館では、平成23年1月22日から3月6日まで沖縄県立博物館・美術館との合同企画展「琉球陶器の来た道」を開催した。近世琉球陶器に焦点をあてた企画展であり、壺屋会場では琉球陶器の出発点となる湧田焼に焦点をあてた展示をおこなった。資料の公開により、琉球陶器研究における活発な議論がこれまで以上にされること期待される。そして琉球陶器研究が活発になることは、琉球陶器の1器種に含まれる厨子の研究においても追い風となるであろう。

本稿では、その厨子に焦点をあてる。厨子は蔵骨器であり、沖縄では大量に確認され、祖先について考古学から考える上で有効な資料といえる。厨子は、死亡年代などが書かれている銘書、納骨している厨子自体の器種、納骨されている骨など多くの情報を有している。また墓に一括して納められていることから、配置関係などを考える事が可能である。そのことより、厨子研究からは過去の人々の様相を復元することが可能と考えられている。そこで本稿では、系図・家譜から考えられている墓に考古学的考察を付与した、これまでの研究を紹介し、考古学的研究からの成果および課題を提示することとする。

2.厨子における考古学研究史

厨子は、沖縄における蔵骨器の総称である。本来、厨子は「仏像・経巻を安置する両とびらの箱。単に書物や食物などをたくわえる箱」である。しかし少なくとも乾隆元年（1736）には厨子の名が「四本堂家札」に使用されていることから、この頃には厨子の名称が使用されていたと考えられる（浦添市教育委員会　1985）。琉球では人の遺骨を再葬して墓に埋納する習慣があり、厨子の分布は、一応奄美の島々から先島に至るまで、琉球諸島全域に及んでいる。しかし、その使用方法については地域差が認められる。また階層などで差異をつけることがある。支配層の間では、家を中心とする個別墓が発達し、厨子を個人または夫婦単位で使用することが一般的であった。

また、厨子には被葬者が死亡した年、納骨した年、墓に納めた年などが書かれている。これらを一般的に「銘書」と呼称している。厨子はそれをもとにした編年研究が行われている。また、銘書が施された陶製の厨子は年代が分かることから、近世沖縄窯業史を考える上で重要な資料でもある。また厨子は、洗骨されて納骨された骨が収蔵されていることから、形質人類学・民俗学からみても貴重な資料といえる。

厨子が研究対象もしくは報告されるのは早く、1888年に西表島を訪れた田代安定が骨を納める壷があると紹介したことにはじまる。ただし、以降は陶芸品や民具としての扱いが多く、考古学的調査は行われなかった。それは、厨子自体が現在を生きる

よしだ・けんた：那覇市立壺屋焼物博物館非常勤学芸員・考古学

人々の祖先に深く関わるものであり敬遠されがちであり、またどのような文化財的価値があるのかということが考えにくかったため、というのが背景として考えられる。

厨子に関する本格的な考古学的調査がおこなわれたのは、浦添ようどれにおける調査がはじまりである。これは1955～56年におこなわれた浦添ようどれ整備に伴う調査であり、調査の一環として収められた石製厨子の調査が行われている。ただし調査対象の厨子の製作工程を検証しているものの、厨子の報告については美術史的な記述が主であった（琉球政府文化財保護委員会　1957）。以後、1980年代になると、沖縄県内における発掘調査件数が増加し、それにあわせて古墓を対象とした発掘調査も実施されることとなる。厨子における分類・編年の先駆けとなる研究をおこなったのが、名嘉真宜勝氏、上江洲均氏である。特に上江洲氏は、厨子を「素材・材質による分類」「器種や釉薬による分類」をおこなった上で、器種ごとに普及した時期の上限・下限の範囲を厨子に記された銘書との照合を基本として設定し、厨子の時期的な変遷を提示している(図1）。上江洲氏のつくった編年モデルは、現在に至るまで厨子の編年研究の基礎となる（上江洲1980）。

以後の厨子研究は、器種ごとに研究を詰めていくこととなる。ボージャー厨子[注1]に関する編年研究を見ていくと、上江洲均氏は、眉が家屋を模し肥厚口縁部は丸みを帯びるのを古いタイプ、眉が小さく肥厚口縁が内彎しており無文であるのものを新しいタイプと分類した（上江洲　1980）。中村愿氏はボージャー厨子の眉に着目し、眉を大まかに7つに分類し、ボージャー厨子の眉は長方形で構成されていたものが次第に円や楕円に変化していくとした（中村 1989）。また金武正紀氏は各部位の計測値で分類をおこない、17世紀末～18世紀初頭のものは器高50cm前後の中型で胴部の膨らむものが多く、18世紀初頭～18世紀中頃のものは器高40cm前後の小型で肩部が張るものが多いとした。また正面の眉は新しい時期に移行するにつれて庇の突出が弱くなるとした（金武　2007）。ボージャー厨子はマンガン掛け厨子と比較して、有す

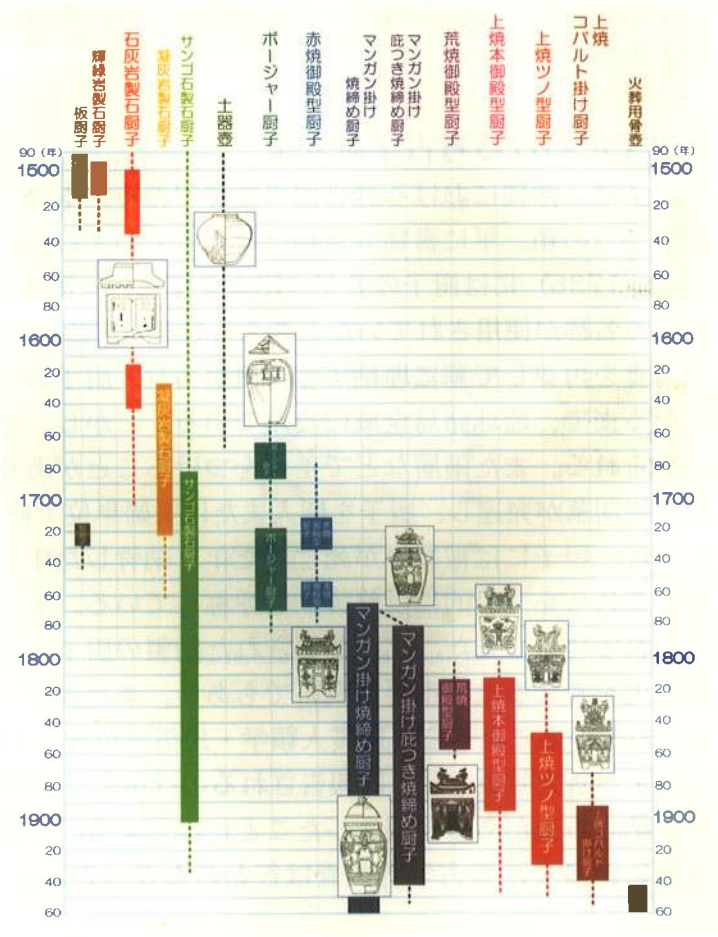

図 1（那覇市立壺屋焼物博物館 2005 より引用）

る属性が少なく、甕正面の眉部分および甕の計測値が分析する上で対象となってきた。

またマンガン掛け厨子は、ボージャー厨子と比べて文様や装飾が増えることから、文様・装飾からみた分類が多く試みられている。上原静氏・下地安広氏は甕側面の蓮華文および屋門の屋根部分に着目し、分類を行っている。そこでは蓮華文は貼付けから沈線へ、屋門は屋根瓦を表現するものから屋根的なものを表現しないものへの変遷を述べている（上原・下地　1985）。中村愿氏の分析では口縁部断面の形状に着目し、長方形→三角形→バチ形状へと変化していくとした。（中村　1989）。安里進氏は厨子の身の装飾部分構成に着目し、身の装飾を3つの文様帯に分類、屋門の形状を4タイプに分類し、Ⅰ～Ⅵ期に区分する編年を構築している（第7図）。そして、この編年区分も踏まえつつ、伊祖の入め御拝領墓、中城村津覇の呉屋家、浦添市前田の比嘉門中墓などで、被葬者の親族関係復元および当時の社会背景を考察している（安里　1997, 2003,　浦添市教委2006）。

以上のように、器形や文様に着目して、厨子自体の編年を組む作業は数多く行われている。しかし、分類をおこなっても、それを実年代にあてはめることは難しい作業となる。それは厨子のほとんどが墓から採集されたものであり、考古学の根幹となる層位からの年代判断ができないというのがある。そこで厨子編年と実年代をすりあわせるのに重要になるのが、厨子に書かれる銘書である。銘書は、被葬者の名前、死亡した年、納骨した年、墓に納めた年などが書かれたものである。この銘書が考古学で言う鍵層の役割を果たし、基準となる。編年が実年代とあわせることにより、考古学の分類ははじめて歴史の中で意味を持ってくる。

ではこれらの厨子編年と銘書、系図・家譜、形質人類学といった総合的な研究で、これまでにどのような研究がなされているのか。また考古学の見地から厨子から何を読みとることが出来るのか。以下ではこれまでになされた3例の研究事例を示していく。

3.玉城朝薫の墓

3-1.位置と環境

最初の事例は、玉城朝薫の墓である。当墓は、系図・家譜が残り、また銘書の残る厨子が在る墓である。当墓は浦添市前田1156番地の豊見城層（小禄砂岩層）の小高い丘の上、小字真和志堂と黒島原の境界に所在する辺土名家の墓である。墓室は奥行2.73m、幅2.39mの小さいもので、面積は6.52平方メートルで、凡そ四畳半弱の広さである。天井を支えるために、21×22cm角の石柱四本が建ち、奥に納骨室を設けた構造をしている。奥の納骨室には合計26基が安置され、内1基が石製家型であるほかはすべて陶製厨子である。厨子の中に、組踊りの始祖である「玉城朝薫」の厨子が確認されたため、歴史・考古・民俗・文学・芸能・建築などの各学問から総合調査されている（浦添市教育委員会　1989）。

3-2.厨子

厨子は、26点が確認されている。そのうち銘書が確認されたのは18点であった。内

訳は、石厨子が1点、ボージャー厨子が6点、マンガン厨子が15点、マンガン庇付厨子が4点であった。この中で一番古いのが、「隆武二年」の年号記載の石厨子である。被葬者は、二代目（家譜では七世）の次男で、父朝智の跡目を継いで玉城間切惣地頭職になった「朝了」とその室「真鶴」である。つぎに朝了の妹「思武太」の厨子甕が古い。この厨子甕は口縁が丸みを帯び、窓は三条の穴が切りこまれ、庇が長く伸び、光沢のある胴部には、蓮華が上手に線彫され、蓋は笠型で頂上は宝珠になっている。また1700年代の中期以降に多い赤焼きのボージャー厨子は、墓内の左右に4基、2基と確認できる。マンガン掛け甕型厨子は、朝薫の遺骨を納めた厨子を最古として、20世紀まで及ぶ（上江洲　1989b）。

3-3.厨子銘書と家譜の照合結果

玉城朝薫の墓は、朝薫もその一人とする辺土名家代々の墓である。辺土名家は、尚真王の三男尚韶威今帰仁王子朝典を祖とする尚氏具志川御殿家の支流で、六世玉城親方朝智を祖とする中宗家の家系である。つまりは由緒ある家であり、当然家譜も残っている。このことより報告書内では墓調査で確認された厨子の銘書と家譜を照合させる作業を行っている（田名1989）。

まず辺土名家の初代、六世朝智についてである。朝智は家譜によると辺土名家の初代であることから、当然墓に葬られているはずである。しかし、当墓からそれにあたる厨子は検出されなかった。朝智は崇禎十三年、命を受けて宮古・八重山への渡海の途中、八重山沖で遭難して果てたとされている。このように行方不明のまま葬られた場合には厨子中に小石を入れておくという慣習があるが、当墓にはそのようにして朝智が葬られている厨子は検出されなかった。厨子に石を入れる慣習がまだなかった可能性が示唆される。

また二～三人の合葬と記されているものが七つある。その七つ全てが、光緒二十七年十月二十八日の日付が記されている。報告書によると、光緒二十七年十月二十八日と記されている銘書は、別字あるいは追加分と記されているものが半数以上占める。そのことから、2～3人を一度に納骨したわけではなく、最初に1人納骨されていた厨子に後から追加して収蔵したケースが4例確認されている。また銘書年代によると、最初の納骨から光緒27年までの間隔が100年以上のモノも確認されている。これは光緒27年当時に、100年以上前の祖先を意識していたからこそ合葬したのであると考えられる。田名氏が述べているように、きっかけは士族門中で一種のルーツ探しや血筋意識による墓内の整理など、可能性は多々考えられる。きっかけが何にせよ当墓では、祖先について強く考えた時期が光緒27年であったことが示唆される。また玉城朝薫の墓での光緒27年記年銘での厨子の形態を見ていくと、マンガン厨子やボージャー厨子など、多様である。それは前の納骨主が入っていた時期のモノのままである。合葬するのを機に、新しい厨子に移し替えることなく、既に納骨されている厨子を使用したことが確認されている。

4.伊祖の入め御拝領墓

4-1.位置と環境

伊祖の入め御拝領墓は浦添市字伊祖の614の1番地にあった。入め御拝領墓は、石灰岩丘陵の西斜面に造営され、その西側約100m先には伊祖の古島（旧集落地）がある。この墓は無縁墓であったが、厨子に墨書された銘書から、1822年に伊祖村の農民（屋号：田ノはあら）が、浦添間切総地頭の浦添家から入め（費用）を拝領して造営した、いわゆる「御拝領墓」であることが判明した。そのことより「伊祖の入め御拝領墓」と命名される。士族とちがって家譜もなく、歴史に名を残すこともない農民家族の歴史を考える上で貴重な資料といえる。墓の型式は破風墓で、石灰岩の岩盤を掘りくぼめて墓庭を造成し、墓庭の東側の岩盤を刳り抜いて墓室を設けている。墓室は、階段状に3段に造成されている。伊祖の入め御拝領墓については、安里進氏の研究がある。厨子編年・銘書・収蔵人骨という多角度からなされた氏の研究は、親族構成復元および社会背景にまで迫っている（安里1997）[注2]。

4-2.厨子・銘書・人骨

墓室内には21基の厨子が納められていた。内訳は、蔵骨専用の厨子19基、水甕転用1基、荒焼転用1基である。その蔵骨専用の厨子を対象として分類を行っている。うち銘書が墨書された厨子は15基あった。10号厨子を例にとると、「・・・・銘苅女子呉勢」と書かれており、「浦添按司御乳母呉勢」と朱書される。また、この墓が浦添按司家から入め（費用）を拝領して造営されたことなども墨書されており、彼女がこの墓の造営に関わる中心人物であったことがわかる。銘書が書かれた厨子のうち、洗骨年が記されて厨子の使用年代がうかがえるものが10基で、古いものは1761年（乾隆26）、最も新しいものは1912年（大正元年）であった。

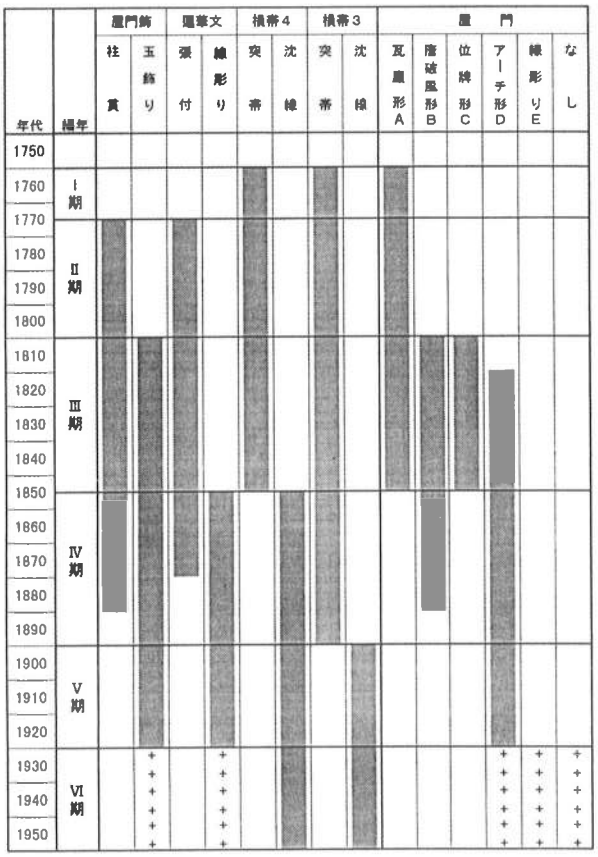

図 2（安里 1997 より引用）

厨子編年において、安里進氏は厨子の身の装飾部分構成に着目した。その中でも屋門と呼ばれる張付け装飾、そして文様帯に着目している。屋門は甕型厨子正面の銘書部分にある張り付け装飾であり、瓦屋形・唐破風形・位牌形・アーチ形・線彫りがある。そして文様帯は、甕に施された横帯と横帯の間に形成されるものである。氏はそれ以外にも柱貫、玉飾り、蓮華文、

横帯3、横帯4の変遷を組み合わせ、銘書のある厨子を指標とし、30～50年前後を単位に6期に区分している（図2）。

そして、その厨子編年と併せて、厨子内に収蔵されていた人骨の形質人類学的分析の結果から、被葬者の性別、死亡年齢、出産経験などが明らかになった。

4-3.家族復元と配置

厨子編年と人骨をクロスチェックする作業を通して被葬者の生没年代を推定し、被葬者の生存期間を推定している。まず死亡・洗骨年代が記されている厨子をもとにして、死亡してから洗骨するまでの期間を2～6年と設定する。そして洗骨年代から死亡－洗骨年代の最小値を差し引けば生存期間の下限が算出できる。同様に、洗骨年代から死亡－洗骨年代期間の最大値を差し引き、さらに人骨年齢の最大値を差し引けば出生年代の上限を求めることが出来る。被葬者の生存期間は、こうして算出した年代の上限から下限の間のある期間ということになる。銘書による生存期間に関する情報が全くない被葬者については、死亡－洗骨期間を2～6年と設定したうえで、厨子年代の下限から死亡－洗骨期間の最小値を引いて生存期間の下限をもとめることができる。また厨子年代の上限から死亡－洗骨期間の最小値を差し引き、さらにこれから人骨年齢の最大値を引けば生存期間の上限を算出することができる。これにより生存期間を表示したのが図3である。結果として、系図・家譜がない状態で、生存期間を推測するに至っている。

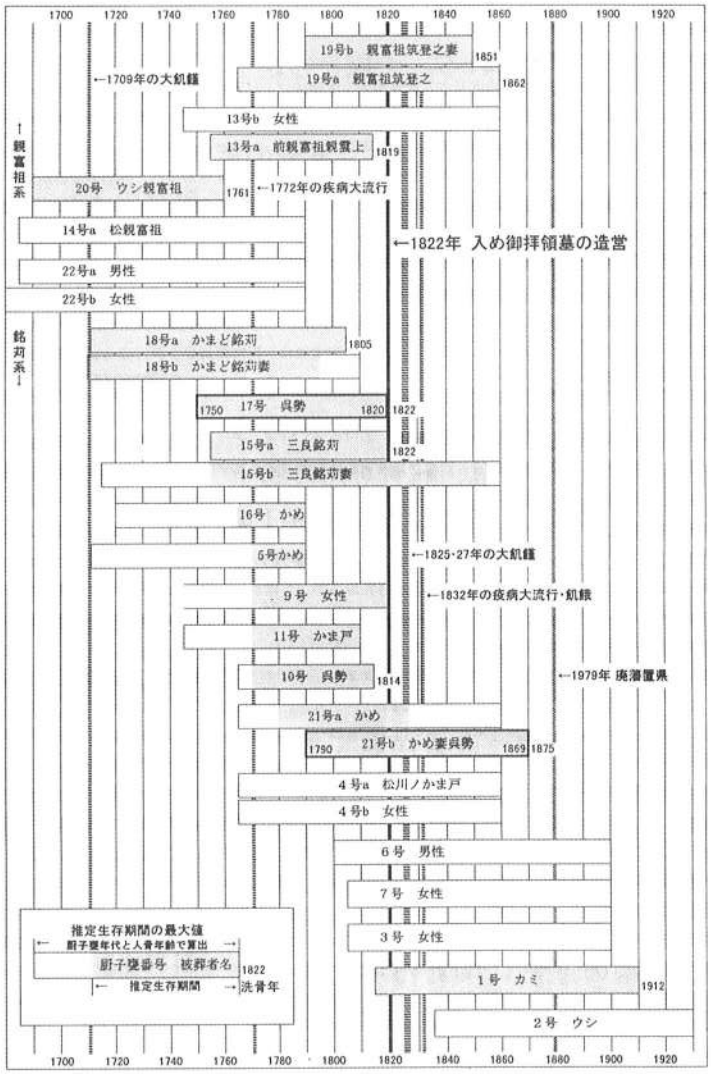

図 3(安里 1997 より引用)

また墓内の厨子は、墓室最上段（一番棚）中央に配置したかまど銘苅女子呉勢＝浦添按司乳母の17号厨子を中心に、そのまわりに呉勢の近親者の厨子が配置されていたといえる。士族の墓であると、当主の厨子を中心に据え、そのまわりに配置していく

スタイルをとる。しかし、伊祖の拝領墓は、当主ではなく呉勢という女性を中心にした家族関係で配列をしていると考えられる。呉勢は浦添按司の乳母を勤めた女性であり、当墓は彼女の奉公により拝領した墓である。当主ではなく、墓をつくってもらうきっかけをつくった人を中心として厨子を配置しているコトから、士族墓と農民の御拝領墓では厨子甕の配置という祖先に対する捉え方が違うことがよく表れている。

5.ヤッチのガマ

5-1.位置と環境

ヤッチのガマは久米島町字上江洲カンジン原内に所在する洞穴のことである。そして洞穴内には、鍾乳洞の前庭部を利用して、近世に属する古墓群が形成されている。なお当古墓群は平成10～13年にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターにより調査・報告されている。厨子は800余基確認されており、1遺跡における厨子の出土量は、県内でも那覇市銘苅古墓群に次ぐ多さである。合わせて、風葬墓という特性からか、人骨の保存状態が良い事が特徴といえる。確認された人骨資料は1000体を数え、形質人類学の観点からも重要な研究対象となっている古墓群である。また地区内最大の墓域である。洞穴内には開口部に約400㎡の平坦な前庭部をもち、ここに石灰岩を積み上げた区画が形成されている。調査では1～13まで区画を分類している（図4）。そして各区画内には多量の厨子を中心として沖縄産陶器の他、本土産・中国産陶磁器が多く検出されている（沖縄県立埋蔵文化財センター　2001）。

ヤッチのガマは西銘・上江洲村落のムラバカ（村墓）であったとされる（上江洲1982）。したがって同じ基準で比較することは出来ないが、あくまで厨子からの歴史復元の事例について提示する。

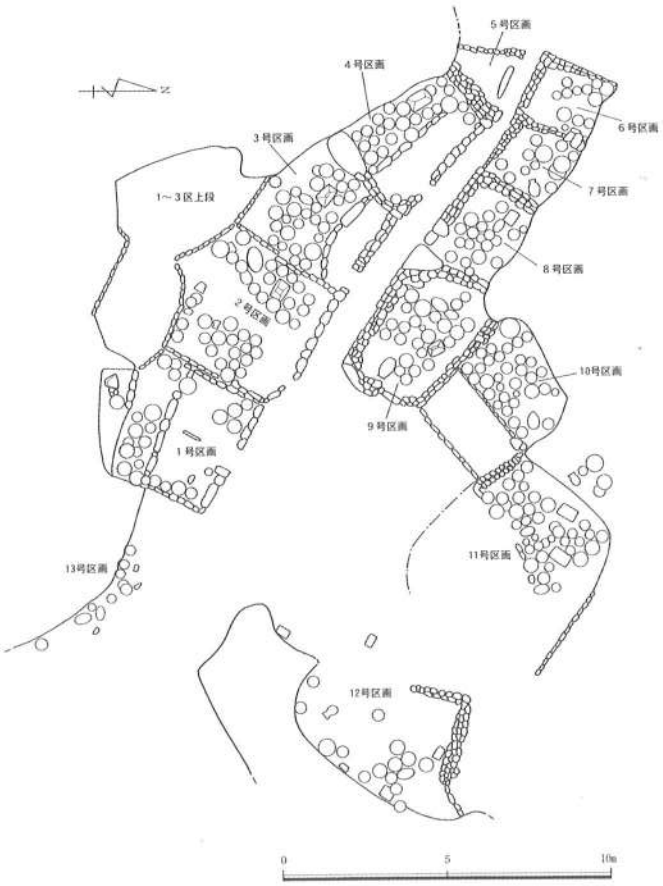

図 4（沖縄県立埋蔵文化財センター2001 より引用）

5-2.ヤッチのガマ先行研究

ヤッチのガマ出土の厨子研究においては、西銘章氏のボージャー厨子の研究に詳しい（西銘2004a,2004b,2005）。ボージャー厨子は、前述したように金武正紀氏によって編年研究がなされている。氏はその中で、17世紀末～18世紀初頭のものは

胴部で大きく膨らむが、徐々に肩部が膨らむようになり、18世紀中頃になると胴部も肩部もあまり膨らまない寸胴形に近いものへと変化していく傾向にあるとしている（金武2007）。西銘氏は、金武氏の設定した編年をベースとして、ヤッチのガマにおけるボージャー厨子の分類をおこなった。そしてガマ内に形成された1・10・11号区画の分析を行い、区画の形成順序について考察している（西銘2004a）。

ヤッチのガマには、間口約20m、高さ約10m、奥行約15mの漏斗状を呈する前庭部があり、そこに墓域がつくられている。墓域は石灰岩で石積みを巡らせ区分けしている。報告書内ではそれを「区画」と呼んでおり、全部で1～13の区画がある。うち12区画に厨子が納められている。報告書および西銘氏の検討によれば、これら区画石積みの形成順序は、層位および区画内の集骨・焼骨の関係から17世紀後半～18世紀中頃という期間内において、『3～9・12号区画　→　10号区画　→　11号区画　→　1・2号区画』という区画形成をなしているとしている（西銘2004a）。

5-3.区画と収蔵人骨個体数の関係

また、筆者は修士論文として、厨子内の収蔵人骨の個体数についての分析を試みている。そして区画で、人骨の個体数に差異が見受けられると考えた。例えば1・2号区画において、1つの厨子に収蔵されている個体数は2人のモノが多かった。10・11号区画においては1・2号区画ほど多くなかったが2人収蔵されているものが多い傾向が見られた。最後に3・4・9号区画では収蔵されている個体数の傾向はつかめなかった。これをみると、厨子の中に収蔵されている人骨の個体数は、区画毎に少し異なる傾向が見られた。年代的には17世紀後半から18世紀中葉という限られた期間の中で構築された13の区画の中で、なぜこのような違いが生じるのであろうか。ヤッチのガマはムラバカ（村墓）であるとされている。このことからすれば、石垣で区切った区画は家族あるいは門中を単位とするとも考えられているが、正確なことは分かっていない。厨子的に納められた人骨数の変化を指摘することはできても、この区画形成順序から歴史的考察をするのは困難なのである。ヤッチノガマで確認された厨子の中で、銘書が確認される例は皆無に近く、銘書から被葬者を読み解くことも不可能である。したがって、ヤッチのガマでは、墓域の区画や区画内の厨子の数と納められた人骨数などの把握はできても、それを家族復元などに結びつけることは難しいのである。

6.おわりに

沖縄において厨子の納置は、18世紀中頃に出された「四本堂家礼」といった冠婚葬祭の指南書に基づいておこなわれていたと考えられる。「四本堂家礼」に厨子の名称が出てきた事や、これまでの調査事例から18世紀から厨子が一般に普及し始めた事から考えても、それは間違いではないだろう。しかし、伊祖の御拝領墓では、当主ではなく墓を拝領した人間を中心とした厨子配置をしていた。ヤッチノガマでは、100年ほどの間に形成された各区画で厨子に収蔵される人骨の個体数がバラバラであった。このような例から考えれば、実際は厨子への納骨人数や墓域内での配置には統一したルールはなく、各地で個別理解されていた可能性が高かったと考えられる。

したがって、系図・家譜や銘書からの解釈を除いて考古学的考察に終始した場合、厨子の分類は可能でも家族復元などをおこなうのは至難である。玉城朝薫の墓は、奥に置かれている厨子や古いタイプとされている厨子に、古い銘書が施されているとは限らなかった。伊祖の入め御拝領墓は銘書がない状況から家族復元を試みているものの、厨子分類および収蔵人骨の推定年齢からの生存期間の幅が広すぎるため、最終的には銘書をもとに系図との関係を考察している。ヤッチのガマでは銘書の残る厨子がないために、墓内での区画や厨子の分類は行っているが、被葬者の家族復元といったことに結びつけるのは困難であった。厨子の種類や配置が、墓に納められた順序の復原に直結しない以上、銘書の残らない厨子から歴史を紐解いていくには、系図・家譜、銘書が残っている厨子から様々な情報を引き出して検討することを進めなければ、考古学的な厨子の分類に終始し、それより先に行くことが出来ないのである。このことからすれば、系図・家譜、銘書の残る墓および厨子資料を今後とも増やしていくことが重要となっていく。そして銘書の残るものについては形質人類学的な分析、また銘書の残らないものについては編年研究や収蔵されている人骨や遺物など他角度からクロスチェックをおこない、総合的研究をすすめていくことにより、はじめて親族や墓域を同じくする集団の人間関係の考察へと行き着くことが可能なのである。

厨子研究はこれまで、歴史学・民俗学・形質人類学・考古学といった、各研究分野間の曖昧な境界による課題の不透明性があったことは否めない。各分野で「何がわかって何がわからない」という成果と課題を抽出して、それを基盤として総合的研究をすすめなければならないと筆者は考える。今回の合同企画展が、厨子研究においても新たな議論のきっかけとなれば幸いである。

本稿は、2010年12月におこなわれた琉球大学史学会第43回大会公開シンポジウム「系図・家譜と祖先認識　－東アジアの中で考える－」で発表した内容を一部修正加筆したものである。シンポジウムでは、発表に対して多くの指摘・御意見を頂いた。本文に反映しきれない点については、筆者の次の課題としていく所存である。発表および本文作成では、琉球大学池田榮史教授をはじめとして多くの方々にお世話になった。末筆ながら感謝申し上げます。

引用・参考文献

安里進　1997　「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者　－近世墓の考古学的調査による家族復元－」『浦添市文化財調査研究報告書』第25集　浦添市教育委員会

安里進ほか　2003　『中城村字津覇・呉屋家の墓被葬者の家族復元』　浦添市教育委員会

安里進　2004　「墓から家族史を復元する」『墓からわかる家族の歴史　－近世墓シンポジウム報告書－』 浦添市教育委員会

池田榮史　2001「琉球の近世紀年銘陶器資料について」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第89巻下巻　国立歴史民俗博物館

上江洲均　1980　「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺　歴史・民族篇』　国分直一博士古稀記念論集編纂委員会

上江洲均　1982　『沖縄の暮らしと民具』　慶友社

上江洲均　1989a　「厨子甕について」『シンポジウム南島の墓　－沖縄の葬制・墓制』　沖縄県地域史協議会

上江洲均　1989b　「玉城朝薫墓（辺土名家墓）の厨子甕」『玉城朝薫の墓調査報告書』 浦添市教育委員会

上江洲均　1996　「厨子甕雑感」『やちむん』12号　やちむん会
浦添市教育委員会　1985　「チヂフチャー古墓群調査報告書」『浦添市文化財調査報告書』第8集　浦添市教育委員会
浦添市教育委員会　1989　『玉城朝薫の墓調査報告書』 浦添市教育委員会
浦添市教育委員会　2006　『比嘉門中墓の家族史-家族の数だけ歴史がある-　比嘉門中墓の調査概要』 浦添市文化財調査研究報告書　浦添市教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　『ヤッチのガマ・カンジン原古墓群　－県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第6集　沖縄県立埋蔵文化財センター
金武正紀　2007「第6章　考古学から見た銘苅古墓群」『銘苅古墓群』那覇市文化財調査報告書第72集　那覇市教育委員会
具志川村史編集委員会　1976　『久米島具志川村史』　具志川村役場
久米島西銘誌編集委員会　2003　『久米島西銘誌』　久米島西銘誌編集委員会
田名真之　1989　「玉城朝薫墓（辺土名家墓）の人々」『玉城朝薫の墓調査報告書』 浦添市教育委員会
土肥直美　2004　「骨からみた近世墓」『墓からわかる家族の歴史　－近世墓シンポジウム報告書－』 浦添市教育委員会
土肥直美　2007　「第10章　形質人類学から見た銘苅古墓群」『銘苅古墓群』那覇市文化財調査報告書第72集　那覇市教育委員会
当真嗣一　1989「考古学から見た沖縄の葬制・墓制」『シンポジウム南島の墓　－沖縄の　葬制・墓制』　沖縄県地域史協議会
中村愿　1989「墓の形態と厨子甕のタイプについて」『シンポジウム南島の墓　－沖縄の葬制・墓制』　沖縄県地域史協議会
那覇市立壺屋焼物博物館　2005　『銘苅古墓群　－蘇った先祖の眠る大地－』
西銘章　2001　「沖縄への仏教浸透の度合い　－厨子研究にあたってのいくつかの試み－」『地域文化論叢』第4号　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
西銘章　2004a　「ヤッチノガマにおける墓域の形成」『久米島自然文化センター紀要』第4号　久米島自然文化センター
西銘章　2004b　「厨子研究における方法論の検討(1)　－久米島ヤッチのガマ資料の検討－」『地域文化論叢』第6号　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
西銘章　2005　「厨子研究における方法論の検討(2)　－ボージャー厨子の初現と終末期のタイプ－」『地域文化論叢』第7号　沖縄国際大学大学院地域文化研究科
琉球政府文化財保護委員会　1957　「浦添ようどれ」『指定文化財解説』　1956年度版琉球政府文化財保護委員会

注１　金武正紀氏の編年では陶製無頸甕形、陶製有頸甕形と呼称しているが、本稿では混乱のないよう元来用いられている民俗学的呼称、ボージャー厨子やマンガン掛け厨子、を用いることとする。

注２　安里進氏は、伊祖の入め御拝領墓の調査をスタートとして「近世・近代墓の調査から家族の歴史を解明する試み」をおこなっている。今回事例として紹介した伊祖の入め御拝領墓の調査を皮切りとして、中城村津覇の呉屋家の墓（2003）、浦添市前田の比嘉門中墓の調査（2006）の各墓で家族史の再構成を試みている。昨年12月のシンポジウムにおいて、安里氏より比嘉門中墓の調査事例を指摘されている。ただし本稿に限っては、家族史研究の皮切りとなった伊祖の入め御拝領墓の事例が適切と判断し、事例紹介をしたものである。